



## *Jmail from the UK*

*Junko Fuse*

英国/ロンドン グリニッジ在住

ロンドンにいて有難いことのひとつにほとんどの博物館・美術館が入場料無料（特別展は別）という点があげられる。聞くとところによると、入場料が払えない（つまりは貧しい）ことが芸術鑑賞の機会を奪うことになってはいけないというのが理由だそう。

英国を代表する美術館の筆頭にあげられるのがナショナル・ギャラリー(National Gallery)である。1日で全部まわらずにテーマを決めて少しずつ見ていくのがよいが、英国 19 世紀の画家たちの作品が展示されている部屋が私のお気に入りである。ここには、ターナー(TURNER, Joseph Mallord William <1775-1851>)をはじめとするこの時代を代表する画家たちの絵があるが、個人的に特別な意味を持つのがコンスタブル(CONSTABLE, John <1776-1837>)の絵、中でも *The Haywain* (「干し草車」と訳されていることが多い) という絵である。英国の田園風景を愛する私には彼の描く風景はどれも心に響くのだが、この絵は別格だ。特につらいこと、悲しいことがあるときは自然と足がここに向き、この絵の前で時間を過ごす。帰る頃には少し心が落ち着いているのだ。

1996 年春、イースター休暇。イングランド南西部ドーセット州にある私立学校(independent school)に住みこんで日本語や日本文化を教えていたときである。このとき私の面倒を見てくれていたのは言語科主任(Head of Language)でラテン語の教師であるヘンリー(Henry)で、クリスマス休暇は彼の家で家族と一緒にクリスマスを過ごさせてくれた。大変お世話になった(今も家族ぐるみで親交がある)人だが、この休みは彼の奥さん(イタリア人)の故郷ボローニャに行くので泊めてあげられないという。「大丈夫?」と聞かれ、「大丈夫。この機会に旅行する」と答えたものの、はてどこに行こうか。そのときふっと頭に浮かんだのが、Constable Country だった。イングランド東部サフォーク(Suffolk)出身のコンスタブルは故郷を題材に多くの作品を残している。*The Haywain* もそのひとつである。この絵が描かれた場所を訪れることは私の長年の夢だった。そう、そうしよう。

日本ではいわゆる一人旅をしたことがないが、不思議と英国では何度かしている。この旅もそのひとつだ。ケンブリッジ(Cambridge)に宿をとり、そこから日帰りして彼の故郷へ向かうという予定をたてた。しかし、私の旅はいつも「思いつき、予約なし」だ。ケンブリッジのインフォメーション・センターで B&B (Bed and Breakfast と呼ばれるホテルよりも小ぶりの手ごろで家庭的な宿泊施設)を探してもらうことにしたが、時期が悪かった。イースターに宿泊地の予約もせずに旅に出ること自体無謀だったのだ。どこもいっぱいだという係の人の申し訳なさそうな顔を見ながらどうしよう…と途方に暮れてしまった。係の男性は少し何か考えている様子だったが、「ちょっと待って」と言ってカウンターの奥から一冊の本を取り出しそれを見ながら電話をかけた。電話を切るとその人は言った。「宿が見つかったよ。でも看板も何も出てないからね。この住所を訪ねて、ドアの呼び鈴を鳴らすといいよ。」厚くお礼を言って、書いてもらった住所を目指した。行ってみてわかったが、そこはケンブリッジ大学の学生の下宿だったのだ。休暇中なので学生は皆実家に戻っていて部屋が空いている。私の部屋はホラー映画好きの学生の部屋らしく、おどろおどろしいポスターが数枚貼ってある。なるべくそちらを見ないようにして荷物をといた。

翌日朝食を取りにダイニング・ルームに行くと、一人の中年男性が既に食事をとっていた。お互いに自己紹介をする。その人はカナダの大学の教授で、リサーチのためにケンブリッジに来ているとのことだった。「君は何しに来たの？」と聞かれ、私はコンスタブルの話をした。興味のない人にとっては退屈な話に違いない。しかしその人は「コンスタブル？The Haywainを描いた人？」と乗ってきた。「妻が好きなんだよ、コンスタブルの絵が。」そこからは流れるように話が進んだ。「いいなあ、僕もリサーチなんかしないで君と一緒にいきたいよ。また後でどうだったか聞かせてね。」と言われてその日はそこで別れた。

ローカル電車とバスを乗り継ぎ、コンスタブルの故郷 East Bergholt に着く。普通の村だ。土産屋や看板などはない。村の駐車場にコンスタブルの絵の題材になった場所の説明をした文章と地図があり、それがここがどこかをかるうじて物語っていた。地図を頭に入れる。幸い自分の方向感覚は悪くない。目的地にたどりつく自信はあった。駐車場を出て、歩を進める。恐ろしいぐらい静かだ。ほとんど人に会わない。頭の中の地図を頼りに進んで行くと、目立たない看板が目に入った。Flatford Mill / Willy Lott's House。ああ、着いたんだ。少し歩くと開けた場所に出た。目の前の風景を目にして驚いた。これは絵か、現実か。長年見たいと思っていた The Haywain の風景がそこにあるが、絵そのものではないか。絵にあってここにはないのは人と犬と馬と荷馬車(干し草車)だけである。あとはそのまま。空の雲まで同じではないか。しばしそこに立ちつくす。しばらくすると落ちていてあたりを見回す余裕がでてきた。質素な小屋が風景をそこねない形で見ると後方に建っているが、サマータイムになるまで休業、と貼り紙がしてあり、閉まっている。ちょうどお昼だし、食事をしながらこの風景を楽しもう。かばんからサンドイッチを取り出す。宿のおばさんが「コンスタブル・カントリーに行くならお昼を作ってあげるから持っていきなさい。たぶん何も買えないと思うから」と言って作ってくれたものだ。おばさんに感謝しながらサンドイッチを食べていると、よく慣れた鳥が近くまで来た。パン屑をあげるとつまんでいる。ふと心は 19 世紀にスリップする。コンスタブルもここで絵を描いていると鳥がそばまで寄ってきたりしたのだろうか。一緒にランチを食べたりしたのかな、などと勝手な想像が膨らむ。食事が終わって少しあたりを歩いてみる。彼の絵によく出てくる教会が絵と同じように遠くに見える。なんて素晴らしいんだろう。興奮した子供のようにあちこち歩き回る。ここで描かれたいくつかの絵と同じアングルで写真を撮る。あとで絵と見比べよう。当時デジタルカメラなどはなく、36 枚撮りのフィルムを 5 本ぐらい持っていったが正解だった。さらに驚きだったのは、数時間の滞在中この風景の中にいたのは自分ひとり。人が一人もあたりにいなかったことだ。なんとという贅沢な時間だろう。19 世紀の英国、いやコンスタブルの世界を疑似体験。彼自身と作品をまた少し深く理解した気がした。

翌日、再び大学教授と朝食を共にする。「どうだった？」と聞く彼に、それまで自分の中だけにとどめていた言葉が大量にあふれだす。好きなこと、関心のあることを話すとき人は能弁になるといういい見本である。「ああ、そこに行けなくて本当に残念だったなあ。この話をしたらきっと妻も興味を持つと思うよ」と教授が心から残念そうに言う。「今度は奥様と一緒にきて、ここを訪ねてみてください。コンスタブルの絵が好きな人ならその価値がわかるはずですよ」と私は答えた。今ならメールアドレスの交換などしていたかもしれないが、まだそのようなものは普及しておらず、この教授とは結局このとき限りの付き合いとなったが、今でもときどきどうしているかなと思いを馳せる人の一人である。

この旅から得たものは大きい。本来の目的がなかったという以外に、出会った人々の温かさやコンスタブルほどの偉大な画家を出しながら観光地化されない地元の姿勢に心を動かされた。確かに英国は建築法がかなり厳しく、周辺の景色と調和のとれない建築物を建てることは自治体が許可しない。しかし、そういう規制がなかったとしても、あの場所は変わらなかつたのではないだろうか。当時と変わらぬ風景であることが地元の人々の誇りなのではないかと想像する。

イースター休暇が終わり、ヘンリーと再会する。「どうしてた？」と聞く彼に今回の旅の話をする。「それはいい経験をしたね」とヘンリー。後で知ることになるが、私が一人でコンスタブルの故郷を訪れたことを知った彼は、それまで私に黙っていたあることを告げようと決心したようだ。そして数か月後にコンスタブルにゆかりのある人物を紹介してくれることになる。その人との出会いについては別の機会に書くことにしたい。

(Book1 作成協力者 茅ヶ崎校元講師)

《加古川校》 兵庫県加古川市

代表 野崎 一恵

細く長く・・・

加古川校を開講してから、今年で12年になりました。私自身、児童英語の教室経営や大学の非常勤講師の仕事など、時間的な拘束があるため、茅ヶ崎のクラスは週に5クラスしか設けられませんが、常に20~30人の安定した人数の会員の方々に恵まれ、近隣の特産の「そうめん」のように細く長く続いています。10代から70代まで、仕事も目標も様々な方が、各々のやり方で、週1回の茅ヶ崎クラスを楽しんでいます。ご夫婦や親子で来られている方もあります。

5年半のニューヨーク滞在の後始めた児童英語教室はもう17年めになりますが、その卒業生が高校生や大学生になって茅ヶ崎方式を始めることも多くなってきました。海外経験のない生徒が、中学3年生から茅ヶ崎方式にはまり、高校2年で英検1級とTOEICスコア950点を取得したことは、わが加古川校の語り草になっています。(その生徒は現在アメリカの大学に留学中です。)

この12年の間に、加古川校で学習して、海外へ羽ばたいていった人は何人いるでしょう。上記のように加古川校全体の会員数は多くありませんが、その比率は高いと思われます。海外で留学や就職をした人、国際結婚をした人は、数知れず、私が休暇で海外に行くときは、その方々に会いにいたりします。この原稿も、出発の朝に書いています。今回は、茅ヶ崎のクラスにご夫婦で4年通ってくださったK夫妻を訪ねます。今年1年オーストリアの大学で客員研究員として研究に没頭されるK氏と奥様は、今は英語に加えて、日常で使うドイツ語を生活の中で習得中です。

ヨーロッパの次は、以前住んでいたニューヨークに行き、ボストンまで足を伸ばして、ここでもまた、留学前に、そして留学中の一次帰国の際も通ってきてくださったMさんに会う予定です。安定した公務員という職を捨て、あまり英語ができなかったのに、努力を積み重ね、アメリカの大学、大学院を修了し、今やMITの関連施設の職員として働いています。当時Class1を開講していなかったのに、Class2からスタートしていただきましたが、かなりMさんにとってはきつかったと思います。最初、発音はカタカナ英語で、音読も詰まりながらでしたが、持ち前の頑張りで突っ走り、今では流暢な英語を使っておられます。

こういった、勉強熱心な会員の方々と茅ヶ崎方式の英語学習を通じて、知り合えたことは私の財産です。今までは、「英語ができるといろいろな世界が開けますよ、選択肢が増えますよ」と、個人の幸福のためにお勧めしていた英語学習が、震災を機に、「英語力と発言力を高めて、みんなで日本という国を強くしていこう」という気持ちが皆さんの中に芽生えてきたように思えます。これからも細く長く茅ヶ崎方式を加古川の地に広めていきます。



加古川校のみなさん

東日本大震災、台風で被災された皆様にお見舞い申し上げます。

渋谷松涛校を開校して2年がたちました。のんびりした性格が災いし、生徒数は多くはありませんが、少人数ゆえの行き届いたレッスンを目指して、日々悪戦苦闘しております。

茅ヶ崎方式英語会との出会いは、2007年9月ごろでした。それまでは大手の英会話学校に通い、J-Shine（特定非営利活動法人小学校英語指導者認定協議会）認定の小学校英語指導講師の資格を取得しましたが、授業自体には物足りなさを感じていました。その後、ある英語学習者のブログで茅ヶ崎方式の存在を知り、英会話学校で満たされなかった何かを埋めることができるのでは？と思い、またリスニング重視のコンセプトも気に入り、自宅近所にある協力校に通うことにしました。小さな教室でしたが、先生もほかの生徒さんも熱心な方でしたので、毎週のレッスン前はかなり緊張していたのを覚えています。

もともと時事ニュースに疎く、知らないことがたくさんありましたが、日々成長を感じることができました。残念ながら、先生のご都合で教室を閉鎖してしまったあと、どうしようか迷っていたのですが、思い切って自分で教室を開くことを決意しました。

大人の方を対象として英語を教えるのは初めてだったのですが、その意識の高さに驚いています。しかし、英語学習者の傾向として、中級者は背伸びをしたがる方が多いように思われます。早く上級の仲間入りをしたいのでしょうね。気持ちは痛いほどわかりますが、あせって自分が使えもしない、また使うチャンスのない単語ばかりを覚えたところで、表面的な語彙力しかつきません。

ところが、TOEIC スコアでいうと900オーバーのような上級者になると、振り返る余裕ができるからか、夢に描いていた上級者のイメージと自分とのギャップに愕然とするからか、基本的なことを重視するようになります。そのチャンスをうまく利用しない手はありません。

渋谷松涛校では、最初は各Unitの一部を暗唱してもらっていましたが、苦勞している方が多かったです。記憶力が悪いからと思っている方が多いですが、実際はそうではなく、基礎がしっかりしていないので、暗唱が本当に苦しんで丸暗記するだけになっているのではないかと考えました。

そこで、昨年から上級クラスの生徒さんに対して、Book1の暗唱を課題としています。上級のみなさんですから、文法や単語で知らないことはほとんどないはずですが、実際に自分でアウトプットできるかという、難しい方が多いです。自分で違和感がなくなるまで繰り返し、音読してもらいたいと思っています。英語はコミュニケーションの道具ですから、アウトプットできるようになってはじめて、知っていると言えます。

基本重視を貫き、中級クラスに在籍していながら、TOEICで985点をとった生徒さんもいらっしゃいます。TOEIC対策の本もかなりやっていたらっしゃったようですが、Book2単語の定着率をUPすることで、達成できたといえます。基本4,000語を自在にアウトプットできるまで、繰り返し音読練習したいですね。

昨今は企業の英語公用語化が話題となっていますが、付け焼刃的な英語学習に惑わされることなく、今後も基本を重視して長く使える英語習得を目指して、受講生の方々と共に成長していけたらと思っています。

**あとがき：** コンスタブルの *The Haywain* を見てみました。布施さんと一緒に旅をしているような気持ちで読んでいます。続きがとても楽しみです。 (KH)